

初江

春泥を小さき長靴闊歩する
春寒の矢切の渡しあるにはある
幼子がそつと開く掌竜の玉

丞子

冴返る朝刊届く咳払い
塾々と日々を重ねる受験生
うららかや受験番号みつたり

瑞枝

余寒なほ回廊長き永平寺
笛吹きのかん沸騰猫の恋
浄瑠璃の名のれぬ母子春浅し

郁子(土)

蒼天に峰の残雪突き刺さる
みつまた
三椏の花満開に紙の町
玉砂利の足裏に響く余寒かな

えり

春浅し七子峠へ辿り着く
土産売り竜の玉色絹の道
蛇の髭の実の色したる鴉の眼



志津子

○日溜りに忘れられたか竜の玉
春浅しオリオン西の空高く
水仙や枯草の中香りたつ

富子

○湯たんぽに一日の苦を溶かしつつ
遠き日に吾子が集めし竜の玉
冴え返る水仙楚々と並びおり

千代

階段に靴音響く余寒かな
開店に客の黒山冴返る
草叢に星の迷ひ子竜の玉

郁子(岡)

山麗に春の息吹のすみれ草
春めいて青春ソングロずさむ
冴返る日当たり捜す散歩道

紀美

点々と雨粒光る枝垂梅
筆洗う水の冷たき余寒かな
キッチンに咲きし一輪白椿

迪子

○穏やかな波と遊ぶ子春浅し
早春の日差しの力土佐の空
今日の糧芋粥こと余寒かな

綾子

星ぼしや灯火管制冴え返る
一人寝の夢のかけらや春浅し
通夜の客帰りて畳の余感かな

文子

隣の子よち歩き春浅し
初めじろ障子に動く影三つ
木漏れ日の梅花黄連切株に

農子

リーダーの唯々諾々や冴返る
冬ざれや老いの嘆きで盛上り
夕日背に脚長の影日脚伸び



味元 昭次 作品

冴返ることも語りて医師若し
目つむれば恥多き日々冴返る
プーチンはトランプが好き春寒し

★次回市民句会

【開催日時】

令和七年三月二十六日(水)

午後一時十五分〜午後四時(予定)

【場所】

オーテピア4階 研修室

どなたでも自由にご参加いただけます